２０１６年5月２１日
湘南桜友会にて
株式会社海外通信・放送・郵便事業支援機構
取締役会長　髙島肇久

どうなる世界　どうする日本

今年１月末、フィリピンに行ってまいりました。この国をはじめて訪れたのは45年前で、その後もNHKの番組取材や外務省の仕事で度々訪問する機会を得ました。今回3年ぶりにマニラの町を歩いたのですが、その繁栄振りに目を見張りました。高層ビルが目立って増え、あんなに多かったボコボコの中古車が随分減り、街には落ち着きが感じられました。地元の記者に聞くと「アキノ現大統領が就任してからの6年間、フィリピン経済は年平均6パーセントの高度成長を続け、汚職や腐敗も減ったからだ」という話です。

マルコス独裁の反省から大統領の任期を1期6年限りと決めたフィリピンは国民の間に続投待望論が強かったアキノ現大統領の母親のコラソン・アキノ大統領やその後任のラモス大統領も憲法通りに6年で退任し、現大統領も今年6月末で辞めることを公約していました。アキノ現大統領は後継に自分の政権の一員だったロハス内務自治相を指名して応援したのですが、結果は「悪党は皆殺しにして死体を海に捨てる」などの暴言を繰り返す南部ミンダナオ島のドゥテルテ元ダバオ市長の当選と決まりました。東南アジアの優等生とまで言われるようになったフィリピンが新大統領の下でこの先どうなるか、予想はつけられません。

ドゥテルテ候補の綽名は「フィリピンのトランプ」でしたが、本家アメリカ大統領選挙のトランプ共和党候補はますます人気が高まって、11月8日の本選挙で民主党のヒラリー・クリントン候補を破るかも知れないと伝えられるようになっています。一方、ヨーロッパではイギリスのEU離脱の可否が国民投票に付されて欧州の政治経済の先行きに不安が広がっています。ロシアのプーチン大統領、中国の習近平主席の振舞いはますます傲慢さを増し、北朝鮮の金正恩委員長は何をしだすか判りません。

国際情勢が一段と混迷の度を深める中で、来週開かれる伊勢志摩サミットがどんな解決策を編み出すことが出来るか。どのマスコミ論調も期待感はゼロです。

何故こうなったのか。その中で日本は一体どうすれば良いのか。フィリピンの大統領選挙を見るまでもなく、世界には今、これまでの常識では考えられないような政治、経済を巡る新たな現象が生まれているように思います。

本日はその一端をご紹介しつつ、皆様とご一緒に「どうなる世界・どうする日本」という大命題に取り組んで見ます。よろしくお願い致します。

（了）